

文化芸術推進基本計画（第2期）に「建築」が初めて文化芸術として明記され、建築文化の価値を社会全体で共有し、未来へ継承する取り組みが本格化しつつある。一方、コロナ禍以降定着した「マイクロツーリズム」という近距離型旅行のスタイルが、地域の歴史的建築や登録有形文化財、古民家などへの新たな注目を呼び起こしている。

本特集では、建築文化と文化観光の交差点に光を当て、各地で開催される建築イベントや古民家再生の事例を通して、その意義と今後のまちづくりへの可能性について考えてみたい。



## 特集

# 建築文化とまちづくり

建築が文化に  
—まちづくりへの期待—

石田 富男

建築を「文化」として捉える視点  
が、近年大きく広がりを見せている。

二〇二三年に閣議決定された「文化芸術推進基本計画（第二期）」では、近現代建築の保存・活用、リノベーション等によるストック活用の推進、国立近現代建築資料館の機能強化、普及啓発といった施策が盛り込まれ、建築が文化芸術の一領域として国家的に扱われることとなった。この動きを受けて文化庁が設置した「建築文化に関する検討会議」では、建築文化の定義や意義、振興のあり方について議論が重ねられ、建築文化振興法の制定を提案する報告書がまとめられた。

こうした政策的な動きは「建築を観る」ことの価値を社会に広める契機ともなっている。これまで日常の背景に過ぎなかった街並みや建物に、「見る」「歩く」「触れる」対象として注目を集め、建築鑑賞が新たな文化的行動として広がりつつある。美術館に絵を鑑に行きように、まちを訪れ、建築を楽しむ、そんなライフスタイルが定着し始めている。

### 建築を楽しむ

この流れを後押ししているのが、コロナ禍を機に注目された「マイクロツーリズム」だ。遠くへの旅行ではなく、身近な地域の魅力を再発見する旅のスタイルは、地域に眠る建築物に光を当てる結果となった。古い洋館、町家、工場跡などが改めて観光や学びの対象として見直され、地域の誇りやアイデンティティの再構築にもつながっている。

建築公開イベントの盛り上がりも見逃せない。たとえば大阪の「イケフェス大阪」では、普段は非公開の歴史的建築や現代建築が一般公開され、ガイドツアーやトークイベントがま

ち全体を巻き込んで開催されている。二〇二三年には京都で「京都モダン建築祭」が初開催され、旧電話局や大学の時計台などの近代建築が新たな価値をもって紹介された。神戸では港町ならではの多文化的な建築をめぐる「神戸モダン建築祭」、東京でも二〇二四年に「東京建築祭」が本格始動し、都市の歴史と建築文化を再発見する機会を提供している。

### 古民家を活用する

築百年を超える古民家の再生も、建築を文化的資源として活かす象徴的な取り組みである。リノベーションにより、宿泊施設やカフェ、コミュニティスペースとして再活用された古民家

は、空き家問題に向き合うと同時に、伝統技術や素材を現代に引き継ぐ「生きた文化財」となり、まちの魅力を高めている。

こうした動きは、まちづくりの視点からも大きな可能性を秘めている。建築文化を軸とした地域資源の活用は、観光、教育、地域経済といった多様な分野とつながり、地域の持続的な発展を支える力となる。

愛知でも、建物公開イベントや古民家再生の動きが活発になっている。次ページ以降では、古民家ホテルの企画・運営を手がける株式会社つぎとの岡田氏との対談を通して、建築文化と文化観光の交差点やまちづくりへの可能性について掘り下げていきたい。



【イケフェス大阪】生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪。2013年度からはじまった船場・中之島エリアなどを中心に毎年秋に開催される建物公開イベント。まちなかを公式ガイドブックを手にした人々が行き交う。

岡田 岳史氏

石田 富男

01 犬山古民家ホテル

**石田** 宿—SHUKU—のご案内ありがとうございます。あいちのたてもの博覧会（以下「あいたて博」）で公開いただいていた建物がその特性を生かした魅力的な空間に再生されていて、非常に嬉しく思いました。忍冬酒を販売される店の部分がそのまま継続されていますが、その空間を通じてホテルの客室に入るといのは面白いですね。

**岡田** 建物全体を借用して改修しましたが、店舗部分はお返ししていて、ホテルとしては借りていません。その部分をあえて通るようにしているのは文化に触れてほしい、忍冬酒を見てほしいからです。



**石田** 空間としても魅力的ですよ。小島家住宅の所有者の方がテレビでNIPPONIAのことを知り、NIPPONIA美濃商家町まで来られて相談されたことがきっかけと伺ったのですが、最初にこの建物を見られた時の印象はどうでしたか。

**岡田** なんて歴史がある建物が残っているのか、良く残してくださったというのが第一印象でした。登録有形文化財よりもっと重要度の高い建物ではないかと思いました。

**石田** あいたて博で残月の間を解説いただいた故長谷川先生はここを重要文化財にしたいと話されましたからね。あいたて博の時は見学できる場所が限定されていてそれ以外の部屋は知らなかったのですが、ベンガラ色の部屋があるのは驚きでした。

**岡田** 最初モノが一杯で何があるかわからなかったのですが、残置物を整理していったらベンガラの色が表れてきて、劣化はしていたのですが、建物の歴史をよく表現していると感じたため、その壁はそのまま残して客室にしました。

**石田** あいたて博で見学させていただいた時に印象的だったのは残月の間に至る部屋の金銀の襖だったんですが、あの修復は無理だったのでしょうか。

**岡田** 実は一枚修復するのに数百万円という見積が出されて予算的にも無理。結局は大学の授業の一環で直していただけたということになり、時間がかかるけど直してもらおうということで預けています。

**石田** 修復後が楽しみです。残月の間から見える庭園は見違える姿になりましたね。

**岡田** はい、元々石が見えないぐらいに植栽が生い茂っていましたが、元の状態でも十分立派な庭園だったのですが、Don Den（古民家ホテルの運営会社）の社長のご縁のある造園会社に思い切って任せ

て見たところ、この立派な石が見えるまで植栽を伐採・整えてくださり、庭が見違える様に良くなりました。この外構工事のおかげで建物価値もぐっとあがりました。

**石田** あいたて博ではここで食事を取らせていただけるということで楽しみです。

犬山城下町には多くの登録有形文化財があり、真野家住宅はあいたて博に参加してほしいと思いながら実現しなかった建物の一つですが、この建物まで含めて古民家ホテルとされたのはすごいですね。

**岡田** 小島家住宅と真野家住宅の所有者の方が仲が良く、小島さんが信頼して任せているのであればということで実現に至りました。今回の開発では二棟はホテル、レストラン、パン屋に改修いたしました。が、今後もお困りの古民家を借り受けて犬山城下町に必要とされているものに改修していきたいと考えてます。城下町に点在する既存店とも連携をとり、国宝犬山城を背景とするこの美しい城下町に泊まるといった、ここできしか出来ない滞在を提案し、犬山の観光をドンデンしていきたいと思っています。



【宿—SHUKU— / 日本料理「古今」】

登録有形文化財の建物2棟を客室8室のホテルに再生。練屋棟と呼ばれる小島家住宅は座敷をレストランに。下本町棟と呼ばれる真野家住宅には愛知県初出店のパン屋さんの営業が予定されている。

## 02 建築ツォリズム

**石田** あいたて博は、愛知登文会が登録有形文化財の保存活用を進めていくために、その魅力を多くの人に知ってもらおうと始めました。今年のあいたて博でこの二つの建物を岡田さんにご案内いただけたというのをうれしく思っているのですが、逆にあいたて博に期待するようなことはありませんか。

**岡田** もちろんあります。このような大きな建物を直して次世代につなげていくのはかなり難しいことで、我々のような事業者が孤立奮闘しているだけでは全然守れない。建物の所有者さんが思いを持って貸していただかないと残せる建物も残らないですし、様々な方が残していこうと一致団結しないと事業は成立しません。そういう意味では、あいたて博のようなイベントが古民家を次世代に繋いでいくこ



【あいちのたてもの博覧会】  
朝ドラのロケ地となった「名古屋市政資料館」のガイドツアー。応募多数で抽選となる人気。

とに対する啓蒙活動をしてくださっているのはすごくいいな、ありがたいなという風に思っています。

**石田** あいたて博ではいろいろな建物の姿を見ていただいているのですが、このような別の用途に再生された姿を見てもらうことも、その魅力を知ってもらう上で非常に有効だと思います。

**岡田** 我々のやりかたがもちろん唯一の方法ではないですが、こういう残し方があるという選択肢を知ってもらえると良いと思います。

**石田** 五月に開催された東京建築祭の中で「日本建築まつり」というイベントがあり、あいたて博も参加したのですが、全国各地で建物公開イベントが開催されていて、「建物を観る」ということに対する関心が高まっていると感じました。このようなイベントをきっかけに建物に関心を持つ人が増えてくると、今までだと古くなったということだけで壊されていたものを残して活用しようという動きに繋がっていかないと期待しています。

**岡田** 美濃では若い建築学科の学生が泊まりにくることが増えてきていて、日本の若者がこういう建物に決して安くないお金を払って泊まって下さるというのはすごく希望ある話だと思っています。こういうものを愛でる感覚、価値観が徐々に育ってきたのかなと。前までは古民家は汚いとか、暗いとかいったイメージだったのですが、最近だと「古民家可愛い」といった言葉もよく聞くようになってきて、もしかしたら価値観が転換してきているのでは!?と感じます。古民家で頑張っている我々としては非常に嬉しく、ポジティブな価値観を広げていくことが建物を守っていくことにつながると思っていますので、あいたて博もその発信を一緒にやっていただけるとありがたいと思います。



【東京建築祭 2025】  
丸の内など東京都心部において5/17～5/25にかけて、特別公開・特別展示、ガイドツアー、イベントなど150以上のプログラムが開催された。写真は旧近衛師団司令部庁舎の特別公開を待つ人々。

**石田** 先日、文化庁の専門官の方とお話する機会があったのですが、文化庁でも建築ツォリズムを推進していきたいということで、各地で行われている建築祭との連携が検討されていて、あいたて博にも注目いただけていました。あいたて博は登録有形文化財を対象にスタートし、その根底には失われていく歴史的建造物を何とか残したいという思いがあります。建築ブームの中で名建築といわれる建物が人気を集める傾向にありますが、あいたて博では身近にある、ある意味では普通の建物も対象にしているのが特徴です。何気に見えていただけではわからない作りの工夫や所有者の思いをあいたて博に参加することで感じてもらえればと考えています。

## 03 有松のまちづくり

**石田** スペースシアでは有松の岡家住宅基本計画の業務を名古屋市中から受託して検討を進めているのですが、つぎとさんは犬山に続いて有松でも古民家再生に取り組まれていますよね。

**岡田** 今年の二月に有松において古民家活用事業を推進するまちづくり会社「有松未来創造株式会社」が立ちあがりましたが、その一員として参加しています。有松でも古民家リノベーションを基軸としたまちづくりを展開していきたいと考えています。

**石田** 有松は重要伝統的建造物群保存地区に指定されるとともに日本遺産にも指定されていて、絞りという地場産業を背景とするストーリーを持つ非常に特徴のあるまちだと感じています。そこに建物の魅力がうまくマッチしてくると非常に面白いまちになるのではないかと期待しているのですが。

**岡田** 建物だけを残しても本質的には文化を継承したことはならないと思っています。文化を発信していく時に、一番良い器が古民家だと我々は考えています。昔は産業も建物も暮らしもすべて風土が密接に関係していました。その風土の象徴である古民家を守ることが文化の最終防衛ラインだと思っています。

**石田** 建物そのものが建築文化として価値を持つとともに、地域固有の文化と繋がり、地域の持続的な発展を支える拠点としても重要です。文化庁では「文化観光」（文化についての理解を深める観光）の推進に力を入れており、有松でも絞りを軸に文化観光に力を入れていこうとしています。

**岡田** はい、名古屋市中が提唱する「文化観光」はまさしく我々がやっているまちづくりと重なる部分が多

く、実際有松でも古民家や有松絞りといった有形無形の文化資源を活用させていただき、それをその価値がわかる方に高く買ってもらいたく。そしてそこで得られた利潤がまた古民家や有松絞りの維持管理に再投資され、魅力が伝われば伝わるほど文化資源が守られていく好循環が生まれる、そんなことを狙って有松では活動しております。

**石田** 地域に入りこみ、まさにまちづくりにつながる形で事業展開されているのが素晴らしいと思います。文化観光の対象として建築文化が取り上げられる時に気になっていたのが、観光として見映えがするものだけに注目が集まることです。有松にも見ごたえある素晴らしい建物がありますが、有松の魅力はそれだけではない。個々の建物が歴史を感じさせる風景を作っていて、それが人々の記憶として受け継がれていることだと思います。如何に次の世代につなげていくか、まちづくりの視点が重要だと思っています。今、全国的に空き家が増えて困っているところが多いのでいろいろ相談が来るのではありませんか。

**岡田** 六月に足助の町並みを活用した地域活性化の推進に関して豊田市と連携協定を結びました。昨今東海地域で様々ご相談を受けています。事業化までには水面下で三、四年かかることが多いのですが、事業を進める上で重要なのは、最後はやはり古民家の担い手だと思います。美濃では七軒空き家があると聞いて地域に入ったら、もっと沢山あった。民間だけではとても無理な数だったので、今年も十月の四日と五日に行いますが、建物を貸してもいいかなと悩んでいる家主さんと使いたいという店主さんをマッチングする「ミノマチャマーケット」という空き家マッチングマルシェをやっています。六年やっているのと徐々に家主とテナントのマッチングが

進み、僕ら以外のプレーヤーがすでに十数件古民家を直し、店を出しています。古民家がかっこいいとか、古民家で事業をやってみたいと思う人が増えることが大事かなと思います。

**石田** 如何にそのまちに関わる人を増やしていくかですね。あいたて博がそのきっかけとなり、その建物の魅力を引き出すかたちで活用されると所有者にとっても嬉しいし、来る人にとっても心に残るのではないかと思います。本日はありがとうございました。



【電線類が地中化された有松の町並み】

慶長13年(1608)に尾張藩によって開かれた東海道沿いのまちで、江戸時代から続く絞り染めとともに、歴史的町並み・山車まつりが継承されている。日本遺産のストーリーは「江戸時代の情緒に触れる絞りの産地～藍染が風にゆれる町 有松～」



岡田 岳史  
(株)つぎと 取締役

星野リゾートにて、大規模スノーリゾートの再生に従事後、古民家活用市場に参画。NIPPONIAを複数立ち上げた後に、つぎとを共同で創業。